1　私を起点として

高層ビルの壊しかたには二種類ある。ひとつは、ビルの各階に爆薬をしかけて一気に爆破するやりかただ。この場合、ビルは一瞬にして崩れ落ち、あたりは一面の瓦礫となる。

もうひとつは、ゆっくりと時間をかけて、ビルから窓ガラスをはずし、内装を取り除き、家具を取り外し、それらをエレベーターを使って順序よく運び出すやり方だ。建設したときとは逆の手順で、ビルの上のほうからボルトを抜き、鉄骨を焼き切り、そうやって時間をかけてビル全体をばらばらの部品にまで分解し、ついにはすべてを地上から取り去ってしまう。

前者のやり方を「破壊」あるいは「崩壊」と呼ぶとすれば、後者のやり方は「解体」である。解体は、次のステージに進むための、積極的な再創造の開始だ。

無痛化する現代文明の方向を変えていくために必要なのは、現代文明を外側から破壊する作業ではなく、現代文明のただ中で生き延びながら、現代文明をささえるボルトの一本一本を、内側からそっと抜き取っていく作業なのだ。現代文明をその内部から解体してゆくこと。無痛化する現代文明を、自己解体へと向かわせること。無痛化する現代文明の脳髄の部分に忍び寄って、その決

定的な接合部にある小さなボルトを、ピンセットでつまむようにして、抜き取っていくこと。これこそが、われわれの目指すべき方向性である。

その作業には、痛みがともなう。なぜなら、ボルトを一本抜き去るたびに、その影響は、作業をしているわれわれ自身へとただちにフィードバックしてくるからだ。現代文明を解体していくとは、現代文明に適応して生きているわれわれ自身の生き方を解体していくことなのだ。現代文明を解体するとは、現代文明の急所にある神経節の細かな一本一本を抜き去っていくことであり、それは同時に、われわれ自身が自分の脳髄のなかに先のとがったピンセットをつっこんで、顕微鏡で確認しながら脳のなかの神経細胞を一個ずつ切り取っていく手術なのである。自分自身の脳のなかから神経細胞をひとつずつ抜き取っていくと、どうなるか。たとえば、視覚野にある神経細胞を切り取っていけば、そのたびごとに、切り取る私自身の世界の見え方が変化していくであろう。最初はよく見えたものが、手術のたびごとに焦点が合わなくなっていくかもしれない。あるいは視野がだんだん狭くなっていくかもしれない。そうやって、いままでできていたことが、できなくなる。獲得していたものを、徐々に失っていく。失ったものはもう戻らない。

それは、大きな不安と恐怖を呼び起こす。自分で自分を手術しながら、もうこのままなにも見えない暗闇のなかへと落ちていって、二度と帰ってこれなくなるんじゃないかと恐れおののく。先が全く見えない闇のなかへと解体していくこと。どうなるかわからない暗闇のなかへと、自分自身を解体していくこと。自分自身を解体しながら、自分のなかに巣くっている内なる無痛文明をも解体していくこと。〈暗闇のなかでの自己解体〉。無痛文明から脱出する道は、この方向にしか開いていない。

右を見ても暗闇、左を見ても暗闇、闇に包まれ先がまったく見えない、いまここで、この自分自身を自分の手で解体していく。解体したあとで、自分がどういうふうになるのか、わからない。それがわからないまま、この自分を解体していく賭けに出られるのか。そこが、無痛文明に対抗できるかどうかの正念場だ。なぜなら、無痛文明とは、将来自分がどうなっていくのかをきっちりと見定め、その大枠からはずれないように自分の将来をコントロールしていこうとする精神性にささえられているからだ。だから、無痛文明の枠組みから脱出するためには、将来自分がどうなっていくのかまったくわからない、そのような闇に向かってゆく選択を、みずからに課すことが必要となるのだ。予測できない、結果のわからない、闇に包まれた、地獄に堕ちるかもしれない、予定

調和の成立していない、そのような道筋に向かって、自分自身を解体していくこと。そのとき私は、はじめて、無痛化する現代文明から脱出する扉を探すことができる。

無痛文明を押し進めているのは、われわれのなかにある「身体の欲望」だ。身体の欲望は、いまの自分がよって立っているところの基本的な枠組みを保持したまま、苦痛を避け、快を求め、人生を予測の大枠のなかにコントロールし、獲得したものを手放さず、肥え太っていく。無痛文明をつき動かしているものは、このような情念である。だとしたら、われわれの内部にある身体の欲望と戦うためには、身体の欲望が進もうとする方向と、ちょうど正反対の方向へとみずからを突き進めなければならない。それは、自分のよって立っている基本的な枠組みを保持することなく、みずからの所有物や既得権を絶え間なく捨て去っていくような方向であるはずだ。すなわち、自分が手にしたものをたえず手放してゆき、自分自身の基本的な枠組みを、深い次元で解体していくような生き方である。

（書籍版に続く・・・）